

特52

特52-525



1200800238405

525

事故本

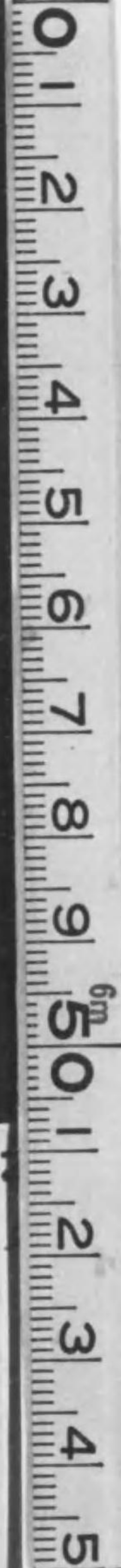
落丁有

p.3~p.6

p.11~p.14

二十
三年 国会道中膝栗毛

国立国会図書館



始



蘇州府志

卷五十二

五十二

白

欠



欠

子の方で、性急なものは、いさむらひ、と世にも未だ就かぬへその舌を反して畢竟アは店
子の者、其の交際するばかりだから夫で宜い借家主を成と其との討で替り替の得んだとよ
くとも形と因の雨上からも兄の爪先まで万事高知は手敷の掛り大分骨の折るとは知れややと
いへば、其の一方、言はねへでもお前さんの方で儲く俵知ぶらうから、家主の家主だけ懸
り、世間での解難けの儲さるだらうなるなどとして買つての恐入つて濟ねへで、だから決
てまでお前をせへ、ナカと守て赤いと、言はねへばかりの影、催其上諸税備置と縁の要るとい
かう儲いて店賃の利益と差引勘定をして見と、取る方が、さう少くてもつばり活計か立ねへか、家
の存続、別よ、ア店賃が高からう、儲けの中、から我々として置て見れば、代り少しでも、儲
き、有りや、早速、其も、置直し、店賃も、必ず、下と、する、から、と、た、く、も、ね、へ、返、照、金、剛、で、味、く、誤、魔、を、掃
や、ア、あ、つ、て、久、しい、雨、寄、附、店、賃、を、考、へ、居、る、間、は、花、主、い、客、の、己、知、だ、ら、う、さ、を、無、料、で、も、違
て、ある、か、何、その、や、う、に、厭、でも、思、は、ね、へ、た、利、た、面、を、家、主、面、として、儲、け、強、り、懸、草、の、詞、よ、い、長、屋、を、思
懸、つ、て、見、ると、聞、く、と、よ、言、情、を、吐、き、し、や、と、師、次、の、提、行、尾、か、ね、へ、の、夜、の、不、要、心、だ、か、ら、九、時、限、り
七
ふ、表、戸、を、閉、る、の、と、好、出、放、詞、を、吐、き、か、揚、句、詞、と、店、子、の、其、の、中、で、も、何、か、家、主、の、憤、怒、を、觸、れ、り、へ、や、う
は、ど、か、も、つ、て、南、瓜、の、三、の、種、で、か、編、の、口、と、拂、つ、た、り、イ、ヤ、申、元、の、見、儲、だ、の、歳、暮、だ、と、を、目、を、持、つ、て、行

く阿諛連中もや頭も低くちやはや言つて愛想の宜己等のやうな朝晩顔を突出して居ても暑い
 寒いの挨拶も做ねへ者もや他所の貸店がないか何どの様も何様非道いとをしても移轉て行ねへ
 どでも思つて居やアぶるの輕蔑扱て犬猫同様の扱ひ方ならんなら銭ア取らねへのかと言やア何ぞ
 てくさうの所ではなくお前三日よ上げせ何神社の屋根替の寄だの町内の誰の花會たのと言つ
 て周施料よでもなりさうなとい通さねへで骨を折り強論よ勤め立て出さうとも做ねへのを家主
 の威光で壓制よ否應言のさき錢ばかりフン奪つて置いて壁の塗替の措置の店賃の直下を風諫と
 やア聞えねへ振をして濟し込んで居やアぶるとい何と鐵面皮さの底の知れねへ馬鹿欲の深へ鈍
 痴氣野爺ぢやねへか當樓の親方の様も純然開けた人なんぞと比較て見りやア鞠ツきり水鶏と鷹
 はどの齟齬だらうぢやねへか 自「ヤイ〜馬鹿のと云ひねへナそりやアお前驚と鳥テ言ムン
 だハチ 民「オット違へねへ悉皆とり違へて表裏反覆と言つたナア恐き入間の甲詛りかチハ、
 再たの當樓の親方も大さう自由とかよ熱く凝り固まつて居ると見へるチ 自「さうさ己等の前尅
 お前よ話しかあると言つたのも矢ばり其自由よ付てのよだの今お前の家主よわたまおさへよば
 かりされて心の裏ぢやアエ、貰いめ〜まと思つて居ても言ひなり次第よ涉無理涉尤もと唯諾
 々と畏まつて小理屈のひどつも言ふとの出来ねへテ言ふのアるを今の自由テ言ふとや權利テ言
 ふとを極く辨別て居なるからのとで己等の眼から見せてせへ實も惘然千万氣の毒至極よ思ふンだ

然しなむら其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、
 ちう言ふなむらやねへか、言ふが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、
 んで居る長屋だから家主との出来ねへ様も言ひなむら、其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、
 前テ其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、
 言ふを言ふ今日形勢も眼を添て居るのよ自由の權利位のこと、傍所新聞と讀でも知つて居
 るから忽地苦情を鳴らし出するまでい無言だ非道だと不平よ堪らねへから長家中を呼び喚ぶ所
 でも無からう彼でも無からうと駄々店子と説き諭めるよ至當の理よの難しも其の言はるるが難題のや、
 言ふ言ふの直下をして呉とかかたもなくバ家さきさきいふして呉と言ふをいよ入れられでも承諾
 ぬ馬術の果は親よを尊べる家主の思も背腹思ひを言ひなむら、其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、
 言ふの言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、
 言ふへよなる言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、
 言ふ此例のあるとどの言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、
 言ふ一心不亂よ新聞雑誌を問たり言説討論など言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、
 言ふ言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、
 言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、なむら、其の言はるるが難題のや、

との出来ねへやうな六道の辻の我利く、贖者社會を天よも地よもない様と思つて消光て居るの
 の惘然も亦一日も速く雲霧の晴れた自由の明るい世界へ導いて遣らうとの老婆心から態々お前
 を誘引し廻つて井生村樓へ出掛た譯々處々自由政談演説などを始めて聞ちやア解るめへこの一度
 よりやア二度十回より廿回と聞くは従ふて腹も落るからまわ當座の中傍訓の自由の燈テ言
 ふ頃日發兌た書入新聞でも購て讀ませへ爾して前演説テ言ふもの演劇か寄席と見たやうな
 ものかと思つたと言つたお前の面白いテ言ふ演劇の従前在來の脚色よて時代物や世話物ぶら
 うのエテシテ鼠小僧の強勢なものぶ已等も彼様もなつて見たいと野蠻な奴も泥棒根生を萌させ
 たりイヤ丹次郎の美麗い藝妓の惚れるも無理ぢやねへ彼言ふ情郎と添つて見たいと箱入娘を浮
 氣者よせる様などのあるからうんな人の風儀を乱し媒介となる見苦しい狂言の一切お廢止おし
 たいもので同じ演劇でも昔日の憚かる處があつてか眞正事實を書なかつた今度の市村座の民權
 演劇などの例の古實家の團十郎か遊い好その義人宗五郎で百姓の塗炭をその身一個は擔當て救
 はふテ言ふ義心から妻子の難さもふり捨て犠牲となる日本魂魄直訴とせる段の思入の無慈悲な
 官吏の壓制を慷慨しむとだ悲憤しいとだ最耐忍の傲切れねへテ言ふ勢色の容貌も顯はれて眼中
 の血走て居る處なんざア實は演劇と見て居る様でいねへやうだの元來人間と産れた限りもやア
 彼位の氣象の持つて居なけりやならねへの當然で案外堂々室信介さんの編輯した東洋義人百

欠

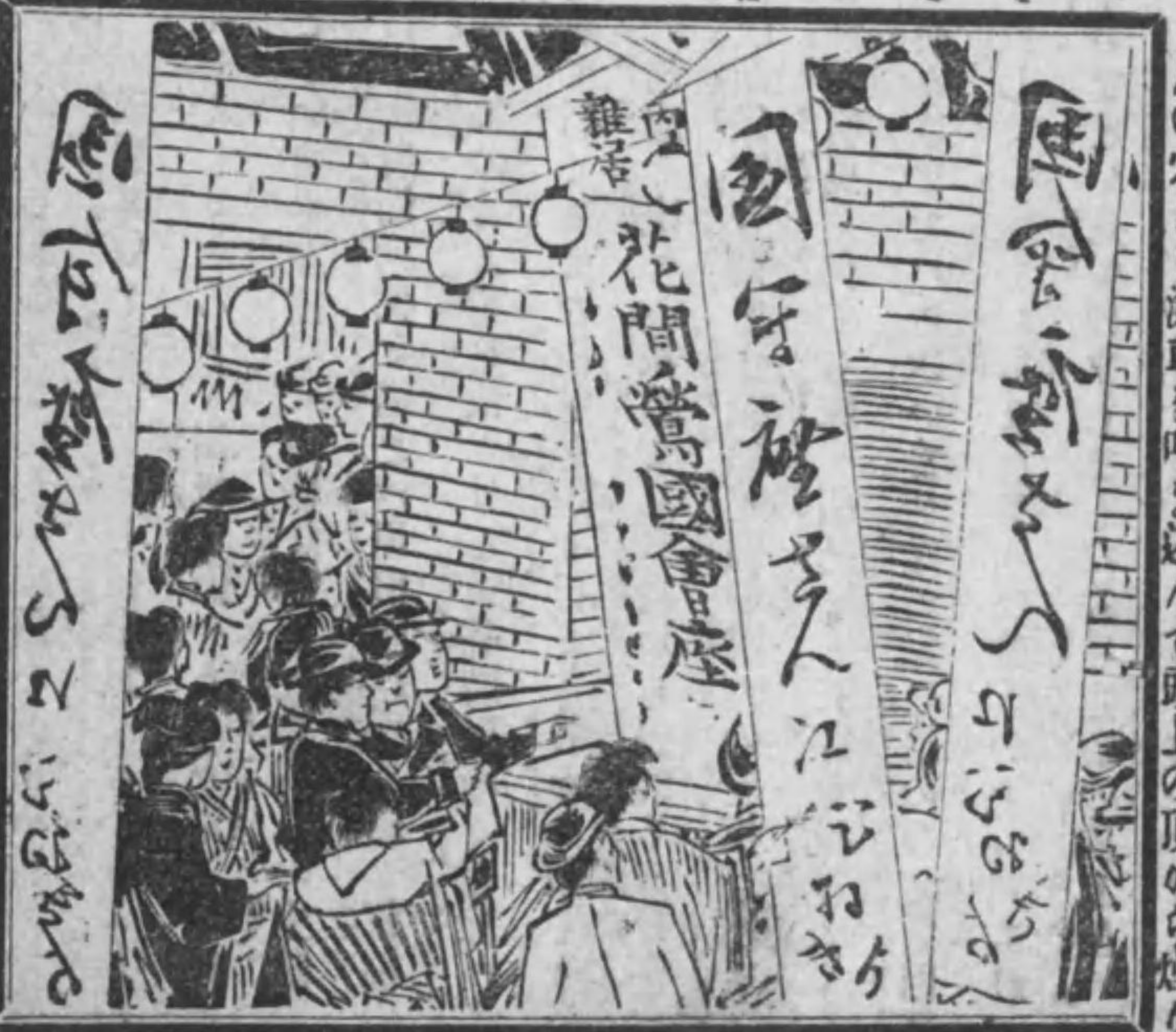
苦どもそるのぢやアねへんだ今言たの何やらお前の勞きて来て休みてへテ云ふ腰付だの己
 遠慮をして我慢をして居るのぢやアねへかと思つて氣を利用して云て見たのサ自由さん何も構
 うあアアねへからずん／＼と休みなせへ 自「そこの此方から云ふとだ宜加減人馬鹿にして
 置きねへナ 民「其様眞實なつて怒られると閉口だの實の處にお前の景色の好どの旅の春は限
 るとか云て獨り面白つて居るのよ己等の足も豆も出来て満足も歩行とも出来ねへ始末休らと
 云たつて休んぢや呉やしねへン按摩利いめ／＼しいと思つたから腹癒よ一寸云つて見たのよま
 あ腹を立ねへで己等のとも少しア察して呉ンねへナア、旅の憂もの辛いものだ 自「そんなよ苦
 しいのならさう云へば宜し何時でも休んで遣るものと 民「ぢやア近頃のお願ひだから此所の茶
 店で一吸して呉ンねへオ、爺さん好天氣だナ「おれのお出なさりませ眞は結構な天氣さまで
 サアお茶と一喫召上りませ 民「オット難有てへオヤ／＼爺さん之の麥酒なのかへナニ茶だど滅
 法界赤い茶もあるもんだ近來横濱で毛唐人の買て行く紅茶との云ふのの斯な色でもして居るの
 か知らねへテ何しろ己等の自由主義の日本屋民八テ云て廣い地球中誰一人知らねへ者無へ
 位の茶器／＼だから茶なんぞでも廉價のいの一切呑ねへのサ先づ大抵平常用の物の通 山本
 で玉露テ云ふ一斤十圓もそるやうな奴と呑で居るから茶て云ふ物の悉皆山吹色にして居ると思
 つて居たんだ處の馬の小便擬ひのあの赤茶よの恐れ入て仕舞たナ自由さん 自「味く云ふせ歩

行かると四文の直打もねへ癖よ口の大さう達者じやねへか爾してお前一斤十圓位の茶と云ふの
 を競進會でも見たとあるのか 民「異う爺さんの辨護をそるぢやねへか己等だつて見たと
 なくても呑で居らアテ 自「年間中白湯ばかりをかチハ、時と爺さんや是から先のさき
 奮發驛までの何程ばかりあるかチ 爺「最四里も足りません道でございませからお早くお着よな
 りまを爾して貴郎方の湯定宿でも湯座いませか 自「ナニ別定宿で言つていねへンどの何テ云
 ふ宿の一番宜だらうチ 爺「さやうでござりませと種々と講宿も湯座りませその其中でも低聲講とヤ
 どの一時の餘程華美は遣り掛けまして外面からの鳥渡堅いやうも見へましたの根の決心のね
 へ同盟者で客の爲めや講中の永續の少しも思ひを唯自分達の怨徳よなるとはかりよ眼を着け金
 満家など見た日よの低頭平身して奉り無暗矢鷹と阿諛と致とやうな最淺猿しい了簡でござり
 まし故段々世間の風評の悪くなりまして命の綱と頼んで居た肝腎要のお客筋からも左の難有
 い湯茶料も下さらなくなり何よも持切れません處から終よ一昨年講社の同盟を解いて皆な閉店
 と致して仕舞今の跡形もなき哀れな姿其他改新講とヤそもござりませその否最是ども別段對し
 たとでもござりませ先づ彼驛中で直正で懇切で堅固してお客さまのお爲筋も至極宜しうと
 ざりそのの民權擴張自由講の愛國屋とヤそのの一番宜しいと存じませ 民「ア、アぢやア何かチ
 自由講の定宿の大黒屋で其他の講宿の悉皆野蠻だと言ふやうなものかチ 自「銀座の薩摩屋の廣

告ぢやねへつら出た又出たお前の頼馬よや眞實よ世話の焼切さねへや今爺さんの言たのハ大
 黒屋ぢやねへ愛國屋だハ民「ム、さのへねへ全く己等ごの聞損なつた」爺「ホイ、爺蠅と
 だ十八番の駄洒落か子己等の最病らいさうさから何かそれだけのぬきまして貰ひてへものだテ
 時よ爺さん該驛の先の何テ言ひませとエ 爺「諸該驛から新街道の両枝又裂れて居りまして右へ行
 れバ漸新道左へ行れば民權道とヤしませと漸新道の方の曲り屈つて迂遠くそとよ先來噴出た苗
 怪珍峯だなど、ヤと大山の連なつて居りまして深く雲霧よ打覆はき天の始終よ曇り勝泥濘路の
 歩行も難く今も崩れ掛りさうな危殆形勢好んで通る人どての少なうござりませと爺自然と往
 還も衰微致し今での新道を開いた甲斐の少しもござりませんが打つ變つて民權道の方の街道も
 廣大て眞正で其上馬車腕車よ氣車と種々便利なもの出来て居りまして道行くよハ此上なし殊
 又電氣燈より猶明るい自由燈とヤと街燈の立てござりまして暗夜も白中も欺くばかり蟻の這ふ
 まで見透る例の少ない民權道未だ見ませねと風評よ聞て居りませと英國の倫敦や佛國の巴里とか
 ヤと文明な土地もあきよハ及ぶまいと思ふ程でござりませとれバ日増し繁花と極めましてそとハ
 盛大なものでござりませと又道とお出ななりませと其の先の慷慨驛とヤと所よて驛内の廣闊
 地よハ自由の爲めよハ亡なり遊ばしました愛國志士方の記念碑や悲憤の泪時雨の櫻などヤと
 かの浮座りまして平常群集の人の絶ませと國內の割烹店鶴鳴亭とヤと方での極細い泥海で漁つた

魚さかなの料理の好物でござりませとそのまの食上つて浮覽なさいませと俚言よヤと通り名物よ佳味
 なしとやらで餌ハ澤山食つて居りませと否早頼とお話しよなりませと不味魚で其山椒醬油で煮
 て出しませとせめしあつて浮覽なさいませと自「成程其奴ア愉快な話し飯令魚なの不味しる
 食て見なけりやならねへも」だシタの民公宜加減よしてそとろく「出帆と做やラコウ爺さん此所
 へ茶料を置く」爺「あれハ澤山難有うございませと左様なら浮機嫌さ宜しうとの主個ハ
 謝義を後よ聞き兩個ハ其所と立出て尙たどり行く街道筋列樹を過とバ原田圃繩手よ續く板橋の
 長き彌生の多日さへはや山の端よ入相の遠山寺の鐘の音よ花ぞ散りける黄昏時尅漸々奮發へ着
 よける抑も當驛ハ其の名よ背か老飯令民權を執て行くもまた漸進を廻り行くも各々此所より道
 を分ちて熱量の方へと志望と國會道中の第一驛前途を決める根據よして自から旅客も多けとバ
 従ふて驛も賑はしく軒を列べし旅籠屋ハ自由改新保守守舊と主義無差別の講社の看板互ひよ我
 田へ水と競ふて樹よ餅の生る勸め口演悪ハ習慣の宿曳が何でも味く引込と天窓を掻きく小
 腰を屈め客を捕へて口よ「因「へイ、お宿りさまでございませんか保守講の浮定宿因循
 屋ハ自分方で浮座いませと明朝ハ成丈けお早く致しませとからお宿よハなりませんか子 固「あれハ
 お客さま失敬と貴郎方さまハ守舊講の浮連中さまとお見受けやしましたの浮定宿の固息屋ハ私
 し方でございませとお泊りなさせませんか 民「何だコウ籠棒奴前方と見てものを言やアおまそん

な間の抜たッぢやねへのだ苦圖——言やぶると尻の穴より瀉車を叩き込んで頭上の頂から煙りを出させるぞ「大きな聲で見咎ねへぢやねへか宿曳なんぞの云ふとよや敵手まならねへで早くれ出ナ 民「だつて餘まり人と馬鹿よして居やアぶるのらサ 自「まあ宜とよと 民「チヨッいめ——しい 火「ハイ——まきのお客さまは機嫌さま宜しう大さうお元氣さまでへ、エー自分時日々軒の出店で火口屋とヤしませよ何かお宿を願ひ度うございませへイ——本宅の舊蛭子屋とヤ跡でございませ故家屋の立派なとい他は類なしでお座敷向等も至極美麗よて其上花瓶斯なども引てござりませ 民「コウ——幾程お前か囀り立ても宿曳の嘘の元たる寒さかなで宅へ行て見りやア着て寝る蒲團も碌々無へやうなよだかも知さねへから其の口車よ減多よや乗れねへのだ爾して一体ね



「コウ——幾程お前か囀り立ても宿曳の嘘の元たる寒さかなで宅へ行て見りやア着て寝る蒲團も碌々無へやうなよだかも知さねへから其の口車よ減多よや乗れねへのだ爾して一体ね

前の所の何講テ言ふンだエ 火「さやうでございませ以前の低聲講とヤしましたのが同盟のヤし合せが確固として居りませなんだ故終よ一昨年講をバ解て仕舞まして現今の處でい何講とヤせでもございませんの何分其頃から運續きました少々お客筋の汚座りませので矢張り其方の汚用宿とヤそ様な講でござりませ然しなへら是とても世間の風評よお聞なさりませ通り開業を致しました時分の様よ對した利益も汚座りませんもゑ眞の外面の義理一遍で〇よさへなりませとんら仮令何講へでも加盟て見度いと存じませるのい自分方の性質で汚座りませのさうヤそ中よも古いお馴染の汚愛顧甲斐よい肝腎の營業の悉皆閑暇よなつて参りましたを夫でい活計の立めへから宿屋の傍ら掃除番とさせて遣らうとのとで先づお蔭さまと昨夜の處でい雪隠の糞代の餘徳も随分這入て來りませので苦しい時よい鼻をも剃げとの譽の汚座りませれば況て貨幣故なら臭い我慢もしなけりやならぬと存じませ鼻をつまみながら糞の番もして居るやうな始末實よ斯などをして居りませしてい迎も末の見通しも附ませぬ故到底お引立よならなけりやならないとヤそのもの何分何か汚愛顧と以て今晚の處も兎も角汚一泊の程と願ひ度う汚座りませと尤も汚宿料の邊い如何やうとも吾曹談を致しませ 民「道理でお前の身体い何だか臭いと思つたッだ如何も懲よ眼が無へか知らねへ掃除の世話と焼たり糞のとまで手よ掛るとい尾漏千萬な耻知らせさう云ふ了簡で居るから不足のねへ年齢をして居ながら容の尻から食着て尻ばかり臭で居なけりや

ならねへんだ糞浴兼の旅籠屋と来ちやア鼻持のなるとぢや無へから己等も泊りの小便として置
 う 大「大さうお素見がれ上手さまで否早開口致しまと情願多申戯なく弊店へ多投宿を願ひ度う
 汚座いませへい〜即ち自分方の立憲改新講の大熊屋とやしまして同盟の宿向の汚道中筋の先
 々もないとや處のございませせ第一宅まで郵便切手と賣下て居りませとをバ諸方への汚報知の
 至極汚便利で殊も東京横濱への毎日往復の乗合馬車を差立身潰會社の漁船も弊店で切符を賣捌
 き汚乗客汚荷物とも總て何事も同社の爲めよい周施盡力致しまと又お座敷の汚意は叶ひません
 ければわせごの方の別荘へでも汚案内を致し汚宿料も何分不景氣の折柄で至つてお客さまも少
 なうござりませ故精々お働らさやして置ませとやして汚馳走向の決してお鹿抹の致しませ
 走据膳とやそので萬事汚丁寧仕つりませへい〜最貴郎さま是より先へお越ふなりましての
 自由講とやして過激なれ取扱いと致しまと宿ばかりで上等の宿とやしての一軒も汚座りません
 からお泊りよなつた方宜しう汚座いませう 民「さう無暗は袖を引張ちや綻ひの裂らア宜加
 減は放さねへか此の頓痴氣奴過激な宿もよく出来たエ、コウ自由講の定宿は限ツちや粗暴過激
 など、言ふ取扱ひをせざるものか何時も屍放講連中の偶然一泊として見ると大變は繁昌をして居
 るので羨ましさの糞腹立で何でも自由講を打潰さんと乱暴な舉動を極める處から宿の方でも捨
 ての置れを證術なしとそれ相應の扱ひをせざるの當然のとだせと他宿を恐く云て自分の方

へ客を引込うとい言語同断の卑劣人足手前などか風義の悪いと言ふんだ全体宿引でお飯と食て
 居やアゝのる癖は眉毛の下は擬露ついて居るのいそら何だまか賞牌の摸形ぢやあるめへんまき
 よ何講の客で言ふ位の見分の附ねへテかあるものか誰だと思ふつのもねへ聞たら吃驚をるだ
 らうの抑も此方の舊自由黨の總理でいねへの其板垣君は引續いた同主義で有名の日本屋民八さ
 まだ勇壯活潑な容貌を見たつても大抵判りさうなものぢやねへか 大「へ〜あまの何とも恐れ
 入まご成程さう伺ひませと眼尻のシんと下つて居て鼻の頭のツツと天へ高く頓馬は汚上品な處
 ぢやおありなごつて如何も自由主義の支持顔をしてお在なさりませとそんな雑兵を見たやうな
 糟客さまとい存じませすお宿を願ひましたの自分共の不注意で汚座りました何か幾重も素寒
 貧を願ひませ 民「ナコ此ン畜生通行の者と捕まへて異う詰つた其揚句素寒貧とい何の事ツたサ
 ア最了簡のならねへんだ有一館で仕込だ腕力自由の拳を食つて見やアのれ 大「否〜如何仕り
 まして素寒貧など、やしました覺へい決して汚座いませんそれの汚勘辨をどやしましたをお聞
 取違ひふなりませしたのでござりませう 自「民公眞實は困らせるぢやねへか幾程お前の力ンだと
 ツて宿引なんぞの口もや迎も勝てるとぢやねへから打捨て置ねへと言ふとヨ又大熊屋とかも旅
 人宿取締規則と犯して客を引て置なごら餘まり口を過るぢやねへか大抵改新講の客と言ふの無
 理勧めも勤めて引込の多くて心ならず其宿を望んで来るテ言ふ様な客の極少ねへから苦し紛

よ宿引も出そのだらうの承知の法律の裏を掻くとい實は太い講宿共たそととも理屈のなるな
 云て見ねへサア何だよもや立派な口も叩かれめへテコウ民州をんな者よや敵手よならせ
 て置いて早く出て来ねへナ 民「オット合点だ彼の此所な間拔野郎さまと見やアのさ己等の所の自
 由さんよ一敗遣られてざら〜して居やアからア悔しけりや臍でも噛んで自亡て仕舞時よ自由
 さん己等の何だか面白くなつて来て足の痛てへのも忘きて仕舞た位たの何と今晚のお宿を取ね
 へで一番宿引の素見と出掛たら何たらう 自「またしても入ねへ口を出しての失敗てばかり居る
 癖よ生氣意なと言ひなさんなそさうと彼所の自由燈よ愛國屋と記てあるの茶店の爺さん
 の言つたのの多分彼所のよだらうから早く着て緩々休むと做様ぢやねへか 民「流石の自由講の
 愛國屋だけだ己等の喧嘩の敵手の宿引の一人も出ちや居ねへせ 自「其所等を思つても堅い宿引
 よい違へ無へト話しなぶらよ歩む間もなく件の愛國屋へ着さけよ主個を初め家内の者が一同
 其所へ迎へ出て 一同「入ッしやいな早うございませと涉機嫌さ宜しう毎度難有う涉座いませお
 茶を一喫召上りませ 主「エ、ト貴郎方の涉両君さまでへ、宜しうございませと涉案内をヤしな
 婢「ハイート答へる下婢の聲の長さ廊下を打過て兩個の座敷へ通りけり

○ 第三編

驛中一と稱をたる自由講の愛國屋朝よ去つて夕よ來る多くの客の旅鳥時求めし間毎〜の十

人集て十種の詭り州さま〜の人情風姿薪を樵る筑波の老叟の峰より高き意見のあるあれ
 ずを漁る筑紫の壯年の海より深き思慮あるあり或の愛國自由の爲め盡を心の千松嶋その陸奥
 の慷慨家ありまたの五陵廓の雪よりも猶潔白さ函館の人々あり赤心赫々として珊瑚と共輝く
 土佐の壯士熱心凝して巾領降山の石ともなるべき肥州の真英雄越後の志士輩秋田の不羈の徒と
 源平藤橘の千差萬別も其の精神の一致一到自由の袖の振合せ地所の縁を結び合ふ頼母子氣ある
 交際の酒宴も互ひ強者同士隔の襖も打明たる大磐石の思想と思想と思想睦みくつろぐ賑はし
 さ右ある一房よ自由兵衛の今風呂場のら浴衣被け手拭片手よ歸り來て見れば民八の脚臥しか
 粟烹る程の湯よ浴る間と塵生が榮花の夢ならねと五十年も猶勝れりと大の字形よ仰反て前後
 生体白川夜船雷よ等しき高射よ呆をなぶらも傍へ寄り肩のとろろを揺りつゝ 自「オイ〜民公
 何したんだ子眞實よ做様の無へ寐坊介ぢやねへかそんな眠けりや湯よ入つて来てお飯を喫し
 疾く寐るの宜ぢやねへか未だ氣が着ねへのかオ、民公起ねへテ申戯ぢやねへせと耳の傍よて呼
 覺せば俄よ勃然と起上り寐ぼけ聲を振立て 民「何だ籠棒奴誰だと思ふんだ飯令腕の細くツても
 樞より固堅な男兒一頭だ憚りなぶら自由主義でもとつて居る者の手前達よ縛られるやうな悪い
 との未だ做ねへんだ夫ども何かを疑つて捕縛つて行くと云ふのなら出る處へ出て証明を立るか
 ら何も怖れるとクアねへのだサア何時でも勝手よ縛つて行やアのさみの鼻猪虎野郎奴

まさか毛髪も曇りの無へみの身体へ繩を掛ることも出来ぬへぶらう併しおきも自由の爲めと思や
 已等の方からお頼み申そのなさう言ふ難題を吐露からよやをきもだまつちやいなへのだ 自
 ウ／＼立て騒ぎ出るとい念の入た寐語ぢやねへか大きな聲をして見咎ねへ民公テばオイ民公と
 脊面を強く打据ると始めて夢でも覺たと言ふ容子よて 民「ア痛々、、、眞實よ苛酷思めへを
 させやアのつたと顔をしめなむら四邊を虚路／＼ 民「オ、自由さんかやわお前好所へ来て呉
 た最少しのとで已等の捕縛らきて盡了處だツツケ 自「何と言ふんだ子確固做ねへナハ、アぢ
 や今の騒ぎの夢でも見て吃驚れたのだ子 民「オヤ／＼／＼成程うれでの夢であつたかや／＼
 先づ一安心頭上の皿まで立退て居た墨丸の元の靈裡へ治まつて自由さんまは聞て呉ねへ斯言
 ふ始末サ前刻お前と兩個伴で此所の家へ宿り込み間もなくお前の湯も往たを思ひなさへると
 子卿臥た故か己等の頼りと眼くなり何よも我慢の做切れなくなつて来て我知らせよあくり／＼
 と船と漕ぎ出して居た處へ袴羽織またの洋服などを着た四五人の奴等が来て突然己等を縛らん
 ど不意の弱身と着入る擬勢よ以前ならば戦々慄々で忽地現場で魂消て盡了清淨潔白な身であり
 なむら人間の権利やものゝ道理を辨へて居ぬうちやあ詩の語のなしよ一度の捕縛の赤耻サ處への
 今日ぢやあの民入も悉皆卑屈の流し皮の剥け石鹼も楓炭糠袋浮石や呉呂の垢擦入らせ艶の自由
 の眞磨き透明るばかりよ洗ひ扱た汚騰上等無類飛切新富立女形の容顔も鏡蓋よ以て之を敷ふべ

き柳橋藝妓の領筋も撥服紗を以て之を匿とて言ふ程で産毛一本汗一滴踏踏の無へ精神だから 自
 大變よ手譽自慢の口演が多分過て肝腎の話し何ごの根から解らなくなつて盡了たの十最と箇
 零よ話しねへ 民「先づ／＼無言で聞給へ其所で已等も驚愕なむら理由も語らせ不禮の舉動スハ
 狼藉ぞ南無三と周圍を取巻くその下を心得たりと脱つ借りの飄然と脊後へ身をひらき柱を小楮
 よ躰を構へ理非も盡さぬ卑怯者何奴なればあのしわざ容子は寄たら此分で助け歸るとならし
 仔細を語り弱虫奴等と大音上よ呼はりたる鬼とも挫ぐ勢ひよ其共よ避易して一時の退き踟躕居
 りし味の味方の多勢を頼みとして再回取て引返し斯して捕縛よ迎ひし理由を聞たしとわらば云つ
 て聞さん即ち其方生來の愚鈍酒器野郎の分財でありなむら纒かよ自由主義をとつたとて其名を
 笠よ博學顔虎の威を籍る狐社流の尻尾よ顯せしと舌舐せり前後揃はぬ突辨よて國會道中此所彼
 所の田夫野人を感溺させ己の主義へ引込んと言語工をよ嘘を構へ味く説論して加盟を勧め或ハ
 會して密事を計る容易ならざる所業ある段不埒千萬不屈至極疾くも此方の耳よ觸せし故若し此
 儘よして差置ば此上如何なる椿事をバ惹引さんも計り知れを依て教唆の根を断て枝葉を枯らそ
 手段の逮捕觀念をして繩よ罹れ若しそきともよ今よりして狂氣の如き心を去り主張する自由な
 る入らざる民權擴張の提燈持を廢るとならば寛仁大度の沙汰をもて此場ハ詮議の次第で免
 返答あらば卒聞ん如何よ／＼と言語尖くまたも詰奇る大敵を物の數とも思はぬ己等今戸松

へん渡れぬ世間の狭へ手前達仮令暗昧無智たりども一寸の虫も五分の魂魄聊か國家の爲めを思へば犠牲も果せども我日本の内輪をば此上完全たらしめんと衆も卒先民權擴張殊も國會も鼻先へ早近づきし今日唯今第一急務とすべきもの其の開設の場合に於て最大必要の政黨ならずや就中各派の中よあつて屹立巍然と一際立て日は旺盛の勢力ある我自由主義を左程よまで蛇蝎の如く忌嫌ひ耳目と稱るゝ已等とバ何故あつて敵と狙ふぞ不所存なる奴輩かな去る年岐阜に於て總理の遭難の其際よ此板垣の斃るゝとも自由の決して滅びぬと言はれしとのあるを知らずや然れば倍々諸氏も堅く執て毫も動かす愈々丈夫の權利を張らる萬代不朽の自由なりうれよ何ぞや手前達の取るよも足りぬへ瘦腕もて撲滅せんと邪魔立弘くも蟻蜂の斧鶏卵を以て恰かも巖よ中るの如く争か及ぶ處ならずシテ其生体の何者だ貧政黨の捕人を擬ふ死物狂ひか何もせよ手向ふ上の何奴此奴の容捨なく片ツ端から撲のめと生命が入らずバ卒來れど大手を廣げて待構へるよ敵も強者動する色なく言たひ儘の其の廣言今よ思ひを知せて呉んろれと云させ四方より咄と一度よ取て掛るを右よ投付け左りよ蹴倒し或の組敷き組敷かれ此所を最期と挑み戦ふ其の形状の宛がらよ飛竜の雲を起とが如く猛虎の風を嘯くよ似て雲時の雌雄と決せぬ折柄オイ民公とお前よ起され眼よ覺したら夢であつたの何を結局の性根場の後席の枕よたつぷりと残りの憂を見次ぐとして鳥渡一棧 自「エ、いめくしい何のとだ下手な講釋師よ狐のついた様よ嘘言半

分の例のお饒舌實眞よ彼なよも舌の廻るものか呆れて口が利れねへのサ斯何時までも苦圖くと言て居すよ早く湯よ入つて仕舞ねへ當樓の下婢達の困らアチ 民「眞よさうだツケとら一ツ風呂へ入つて來やうト素裸躰よなつて立上るバ 自「お前風呂場までの大變よ遠いから浴衣でも引被て行なけりや風邪を感冒アなそきとも邪魔なら憤鼻揮丈よても締て行ねへど見咎ねへちやねへか 民「ナアニ構うよのがあるものか誰の笑ふの誹謗よ自主自由の己等の身軀だ殊よ息子の束縛も解いて遣らなけりや義務が立ねへテ言ふものサハ、、したる自由さんエ若し下碑のお飯を持って來たら晝間の勞を拂ひ給へ清めて食べと鳥渡一献聞し召たい積りだからお神酒を言付て置いて呉んなよ宜か頼みやとせ頼むは濡衣さアまさまかト口淨瑠璃とかざりながら梁行く鼠のそれならで廊下傳ひよ下りて行く跡よ自由兵衛の散ばりある四邊の荷物を取片附實よ世話の焼る奴でいあると吐きつゝホツと一息烟草煙らよ其折柄隔ての襖よ徐々開け入來る一個の書生あり自由兵衛のその者の未だ何とも判らねの立たる膝と行儀よ直し最懇懇よ打對ひ 自「未だお見請やさぬ先生何か多用でもムりましてか 書「否別段用ちふ程のとでもないぢやが過刻より隣房よ於て同友と小酌とも張りをつて失敬なごら君等の談話を襖越しよ聞らふと却々我輩如きの及ばざる熱心家ぢやからして君等兩氏を弊房へ招待の聊か交誼を結ぶの意を表せん爲め鄙酒粗肴なごら懇親會でも開きたいちよ精神で罷り來いで我輩も舊自由黨の者ぢやから君

なとと言ふなかれ今厠房へ往をつた僕が朋友の長髪長髯の生へて恰かも鬮羽は鬮鬮
 ぢや依て強壯活潑なる容貌の張飛然たる君及び又一人の玄徳平たる浮朋及も仮令桃園ならぬ
 も臨んで義を結ばざるを得ざるの場合ぢやから遠慮して何ぞ鬮踏とやある左なくも三千七百
 の同胞ッ口卒來給へど手を執て是非よと強らるる否み兼件の書生の宴席よ至きばろきく一饗應
 の準備あつて酒地肉林の待遇よ最初の程の遠慮して居し自由兵衛も杯盃と干とよ隨ひ酌酌しけ
 れバ性質の飄輕と顯はして洒落と交たる雜談も果の何方の主客やらろきとも判ぬ平和親睦打興
 じて居たる處へ當家の下婢の遽だしく呼吸を切して駈來り婢「アノお客さま、お大變でムリ
 まと當家のお伴さまとお隣房の貴郎さまのお伴さまとの何なとつたものか便所の前でお兩個さ
 んとも仰反て眩暈して在ッしやいませから何ぞ直お來しなさつて下さいませとの注進を聞より
 書生も自由兵衛も吃驚仰天此の開も如何よ若し反對黨の所爲よあらせや但し怪我か過ちか何
 んもせよ容易ならざる一大事ある出來せり打捨置べきとならねバ卒應援よ繰出さんと兩個の取
 るものも取敢ず直ちよ現場へ駈着て見れば果して氣絶し居れば水よ藥と上と下捏返したる混雜
 騒動自由兵衛の傍なる手洗鉢の水と汲取り今民八よ飲さんものと不圖の面と差覗くよ正しく
 民八よ相違の無れと何したもののやら面色の印度から來た石炭焚の炭團屋の煤箒よ履はれたと云
 ふ梅搥しきよ眞黒なれば倍々不審の晴遣らと水を一口含ませて耳の側へ口を寄せ「自一民公ヤ一

一「民八ヤ一ト氣と確かよ持ねへヨ一丈夫しないとお前の膳の汁も肴も食て盡了ヨ一と
 呼生られて漸々よ心附たの呼吸噴返し切なき中よも例の滑稽負傷者と云ふ思入よて最苦し氣よ
 起も上らせ「民「オ、自由さんか遅かりし遅かりし今宵の椿事の一伍一什まの一通り聞て呉い頃
 しも彌生の臘天薄黒暗の廊下とバ風呂場よたどる途次春の夜寒の身よしみて風邪でも感冒たか
 鼻をぞると拍子も拍子生憎どろの鼻風の烈しさよ歩みの洋燈を消て仕舞咫尺も判らぬ眞の闇夜
 鎖砲風呂よ行くも歸るも進退谷まる沸騰の浮沈わはか奇策と旋らして明るい方へ須臾も速く此
 場よ去らんと心の裏の矢狂よあせれど弓張の月さへ洩ぬ暗紛れ此等の男兒の忍耐處と我慢をそ
 る中稍どのとよ遙か彼方よ人聲の聞ゆるあそ天の輿へと手で撫足で探りながら行くの行けども
 方位さへ西東ともわか狭井の呼べと應せぬ家内の廣さ終よ巡つた揚口の果變な所へぐれ込で突
 然正を踏外し眞轉倒よ轉がり落ると其所の何やら炭納屋らしく手よ觸るもの、俵のみもゑ斯な
 所よ長居の無用と太く打つた腰骨の痛さを堪へて這上り顔よ引張る蜘蛛の巣を撫除けながらたど
 る間もなく便所の横手へひよつくり出たの西洋諸邦よよくある例壓制政治の下よあつて苦しみ
 抜きし人民よ自由世界の空氣をバ始めて吸たと一般で實よ蘇生の心持やれ嬉しやと思ふ折柄蠟
 ど吹來る一迅の生臭ならで糞臭き夜風の鼻をつんざきて臭氣よ身の毛も戦慄ばかり怪しのとど
 思ひつゝ見遣る傍の便所の内より顯はれ出たる一個の怪物脊高き身よ白衣を纏ひて長鬚長髮

2420
6

六三

43154

明治廿年三月十四日翻刻御届
同 年三月 出版

翻刻出版人

發兌元

(定價三十錢)

東京府平民

長井庄吉



日本橋區本石町貳丁目十六番地寄留

上田屋

日本橋區本石町貳丁目

0.90

終